

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 28 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380219

研究課題名(和文) 資本移動、国際貿易と経済成長：市場開放のタイミングについて

研究課題名(英文) Trade Pattern and Economic Growth: Timing of Openness

研究代表者

胡 云芳 (Hu, Yunfang)

神戸大学・経済学研究科(研究院)・教授

研究者番号：30379466

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：物・資本の国際間移動に伴って世界経済がかつてない緊密な関係になる。このグローバル化傾向について、それぞれメリット・デメリットあることが経済学者に強調される。安定的持続可能な経済成長を保つため、どのような条件で国内市場を開放すべきか、またその逆になるかは重要な課題である。これらの経済現象を意識し、本研究では国際貿易・資本移動を考慮した動学的一般均衡モデルを用いて、市場開放のタイミングおよびショック(危機)の国際間の波及効果を分析した。これによって、発展の遅れる国が先進国に追いつくこと；経済発展における貿易パターンの変化；および累進税の安定化効果など新しい結果を得た。

研究成果の概要(英文)：Economic development experience in Eastern Asia is characterized by active openness to the world markets. While commodity trade has been policy promoted in most economies of this region from the beginning of their development, there are different views on the timing of financial integration. Paying special attention to the timing of market opening in both commodity trade and financial integration, we examine the possible development paths under different environments. Existing studies separately illustrate that growth paths and the benefits of opening up to the world economy are closely related to the stages of domestic economy development. We construct a model with both international commodity trade and financial transaction in order to reexamine the development paths of an open economy in an integrated way. We found that, among others, late-developing economies can catch-up with the early-developed ones; industrial structure changes along with economic development.

研究分野：国際経済学 マクロ経済学

キーワード：経済成長 資本移動 貿易パターン 財政政策

1. 研究開始当初の背景

伝統的な国際貿易理論では、生産要素である労働と資本（所有権）の国際間移動を捨象し、消費財や資本財等の物の貿易のみを仮定したが、現実の経済事情をより正確に理解するためには、ますます増えてきた資本（所有権）の国際間移動を国際貿易モデルに取り入れる必要がある。また、経済成長における市場開放の重要性が東アジア経済発展の経験においてすでに明白化された一方で、財や資本市場が経済発展の早い段階で開放された多くアフリカ地域の経済がなかなか長期的経済発展軌道に乗れない例も少なくない。市場開放のタイミングが国際貿易のパターンそして長期的な経済成長に影響を与えることは考えられる。さらに、世界経済の安定性に関するショックの波及効果も興味深い問題で、検討する必要がある。

2. 研究の目的

物・資本の国際間移動に伴って世界経済がかつてない緊密な関係になる。このグローバル化傾向について、それぞれメリット・デメリットあることが経済学者に強調される。安定的持続可能な経済成長を保つため、どのような条件で国内市場を開放すべきか、またその逆になるかは重要な課題である。これらの経済現象を意識し、本研究では国際貿易・資本移動を考慮した動学的一般均衡モデルを用いて、市場開放のタイミングおよびショック（危機）の国際間の波及効果を分析することが目的としている。

本研究で以下の問題について明らかにする。1) 財や資本の国際移動がある経済に、市場開放の成長効果について：国際貿易と経済成長について既存研究を踏まえ、資本移動と財の貿易を同時に考慮したモデルを構築し、市場開放と長期的な経済成長の関係を再検討する。2) 市場開放のタイミングについて：1) で構築したモデルを用いて、財市場

および金融市場の自由化のタイミングについて、その長期的な効果を検討し、関連既存結果と比較する。3) 経済の安定性問題：閉鎖経済と比べ、財や資本市場が自由に移動できる経済における経済の変動性が高いことを示されているが、借入制約のような条件がある不完全な金融市場における安定性効果を再検討する必要がある。

借入制約を動学一般均衡モデルに入れる研究が多いが、財の国際貿易と資本の国際間移動を同時に取り入れる分析はまだ少ない。いくつかの研究では完全な国際貸借市場を仮定し開放経済の安定性について議論したが、不完全市場ではこれらの結果がどのようになるかはまだ十分に検討されていない。

本研究は以下の特徴ある。1) 金融市場を動学的一般均衡モデルに導入し、借入制約の効果が検討できること。財市場および金融市場の開放タイミングについて分析し、既存研究結果と比較すること；2) 財の貿易、資本の移動と経済成長の関係を同時に検討すること；3) 経済の安定性について、既存の研究は資本の国際間自由移動を依存するため、借入制約を導入し、開放経済における不決定性が出やすいと言えるかどうかを再検証できること。最終的には、不完全な金融市場を考慮したもとの市場開放のタイミングについて、その効果は従来の研究結果を修正することが期待できる。

3. 研究の方法

研究内容に基づいて3つの研究方法に分ける。第1は、マイクロ基礎のある借入制約条件を動学的一般均衡モデルに取り入れ、市場開放のタイミングについて理論的分析を行う。主として借入制約を動学一般均衡モデルに導入し、国際貿易、資本移動を含む理論モデルの構築を中心に研究を進める。特に以下の点を注目する。各経済主体の最適化行動

によって、借入制約を導入し新しい金融貿易モデルを構築する、新しいモデルの構築にあたって、できるだけ多くの研究会や学会に出席し、専門家のコメント・意見を積極的に受けることである。

第2に、経済の安定性分析をおこない、バブルの発生する条件およびその波及効果を検討する。具体的には、構築したモデルを用いて、市場開放のタイミングについて理論分析を行う。財市場の開放タイミングおよびその効果、既存研究と比較する；金融市場の開放タイミングおよびその効果、既存研究と比較する；経済の安定性およびショックの波及効果について分析し、自由資本移動に基づいての既存研究の結果と比較する。

第3に、数値計算を中心に進める。第2段階で得られた理論結果について数値例を用いて検証した。また、具体的なマクロデータを用いて、マクロ経済政策の効果をシミュレーションする。研究の進捗に合わせて、適当なタイミングで論文を作成したうえで、それらを学会、研究会議、セミナー等で報告をし、出席者のコメントをうけて改善を行った。マクロ経済政策の効果のシミュレーション、および経済政策の詳しい効果の検討はまだ残っている。

4. 研究成果

1)基本モデルの構築と分析。もの・資本の国際間移動のタイミングは経済成長経路にどのような影響を与えるかを検討するために、従来の動学国際貿易モデルに国際間の貸出市場を入れる必要がある。そして、本研究ではまず貿易パターンと経済成長経路に関する理論モデルを構築し分析することにした。従来の動学国際貿易モデルにおいては、国際間の貸し借りができないと仮定し、発展の遅れる国が永遠に先進国に追いつくことができないと既存文献で示した。国境を越えた財の移動と国際資本市場を同時に考慮したモ

デルを構築し、貿易パターンと経済成長の関係を調べ、発展の遅れる国が先進国に追いつくことが可能という結果が得た。

2)貿易パターンの変化。1国経済の発展につれて、それぞれの生産部門への資源配分が変化していく。ものやサービスの国際間移動がこのような資源配分変化に影響を与えるため、国際貿易と経済成長を同時に扱う環境が必要なる。農業部門、製造業部門及び貿易しないサービス部門が構成される小国経済を対象に、小国以外の世界経済がすでに各国の定常均衡経路に到達したとき、当該国の発展経路がこの国の初期資本保有量に依存することが示した。資本の少ない国ほど、より多くの資源を農業部門へ配分し、経済発展につれて資源を相対的に多く必要な製造業部門やサービス部門へシフトし、農業部門の割合が減少する結果が得た。

3)財政政策の効果。標準的な実物景気循環モデルにおいては、非線形所得税がマクロ経済を安定化させる効果可能と言われている。一方で長期的な経済成長を伴う閉鎖経済においては、累進税の安定化効果が無くなる可能性が近年の理論研究で指摘された。開放経済にこのような安定化結果が残るかどうかは検討し、時間選好率が内生化したモデルは累進税が経済を安定化させる効果がある一方で、時間選好率が外生である場合、内生成長の閉鎖経済と同様に、累進税の安定化効果が無くなることを示した。

4)開放経済における均衡の安定性問題の再検討。小国開放経済においては金融市場の開放によって、貸出は世界利子率に従わないといけない。よって、閉鎖経済と違って利子率の価格調整機能がなくなり、内生変数またはその成長率に条件をつけることによって、均衡の安定化条件が変わることが確認した。

以上の2)で得た結果を共著論文とし学術誌で掲載済みである。3)で得た結果を国際共著学術論文の形として完成し、英文学術誌

への投稿準備が整っている。1)と4)での結果をまとめて、7月に学内誌へ投稿する準備を進めている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

Yunfang Hu and Kazuo Mino, 2014, Capital Accumulation and Structural Change in a Small Open Economy, *Pacific Economic Review* 19: pp. 634-656.

[学会発表](計 9 件)

1. Yunfang Hu, 2016年3月24日 2016年3月25日, The 2nd Workshop on Macroeconomic Dynamics and International Trade, Bloomington (アメリカ)
2. Yunfang Hu, 2015年12月4日, 2015 Kobe-Peking Joint Conference on Economics, Beijing (中国)
3. Yunfang Hu, 2015年9月3日 2015年9月4日, The DEGIT XX, Geneva (Switzerland)
4. Yunfang Hu, 2015年3月21日, One-Day Conference on Economic Growth and Open Macroeconomics, 京都大学(京都)
5. Yunfang Hu, 2015年3月10日, Academia Sinica Seminar, 台北(台湾)
6. Yunfang Hu, 2014年9月27日, The DEGIT XIX, Nashville (アメリカ)
7. Yunfang Hu, 2014年8月20日, The 14th SAET Conference on Current Trends in Economics, 早稲田大学(東京)
8. Yunfang Hu, 2014年7月11日 2014年7月13日, The 15th International Meeting of APET, Seattle (アメリカ).
9. Yunfang Hu, 2014年3月7日, The 6th International Conference of Macroeconomics and Policy, GRIPS (東

京).

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

()

胡云芳 (HU, Yunfang)
神戸大学・大学院経済学研究科 教授
研究者番号: 30379466

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号: